

---

# もう一度君に逢いたくて

Ruca

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう一度君に逢いたくて

### 【NZコード】

N1477D

### 【作者名】

R u c a

### 【あらすじ】

電車の中で、出会った一人。それは、偶然ではなく主人公歩亜のしたある行動が始まりだつた。しかし、知らずに、恋に落ちていく歩亜と智。そんな時、智が交通事故に・・・。原因是思いもよらぬ事だつた。悲しく、切ない一人の結末は・・・。

# プロローグ 第1章 第2章

## プロローグ

「ニヤー、ニヤー。」

「どうしたの？お腹すいた？」

私は、買い物袋の中から、明日のお昼に食べようと思っていたツナ缶を取り出した。

最近毎日のように、仕事帰りの私を待ち伏せしている猫だ。取り出したツナ缶を猫にあげた。

勢いよく食べ終わると、足もとに体を何度もすり寄せた。

私は抱き上げ、優しく撫でてあげた。

すると、猫は嬉しそうに、ゴロゴロとのどを鳴らした。

家へ、向かおうと歩き出すと、私の前を何度も横切り、邪魔をした。いつもは途中で諦めるのだが、今日はマンションのエントランスまで着いてきた。

流石に、エントランスの中までは入つてこなかつたが、エレベーターに乗り込む私の後ろ姿に向かつて、ずっと泣いていた。11月だというのに、とても冷える夜だった。

## 第1章 出会

春の日差しが暖かく、気持のよい休日。

私の仕事はサービス業のため、お休みは平日だった。

一人で、ぶらつと出かけた。

藤沢から鎌倉までのローカル電車で、窓から見えるのどかな景色を

眺めていた。

車内はすいていて、空席もあつたが、私は扉に寄りかかるように立っていた。

藤沢から乗つて、江の島を過ぎた頃、一人の男の子が乗ってきた。私の寄りかかっている扉に、向かい合った状態で立っていた。

私は外の景色に気を取られていた。

ふと、視線を感じその方に顔を向けると、前に立っていた男の子からものだつた。

目が合つてからも、彼は目をそらさなかつた。

吸い込まれそうな綺麗な瞳で、真っ直ぐに見つめられていた。

私もそんな綺麗な瞳から、目をそらすことが出来なかつた。

由比ヶ浜の駅に着き、扉が閉まる瞬間だつた。。。。。

彼は私の手首を掴み電車を降りた。少しひっくりした。

でも、もし、彼がしていなかつたら、きっと私が同じ事をしていただろう。

「あの、突然すみません。」

彼は掴んでいた私の手首を放した。

少し鼻声の彼の声は、私の耳にとても心地よい声だつた。

「ううん。」

私は首を横に振り、少しそいきの声で答えた。

明らかに年下である彼に、少しでも若く見られたかったからだ。

その後、私たちは、どちらからともなく歩きだした。  
どちらがリードするでもなく、声を掛け合いつでもなく、  
まるで前もって行く先を決めていたかのよう・・・。

たどり着いたのは、海辺のホテル。  
窓からは、湘南の海が見渡せた。

窓際に立っていた私を、後ろから優しく抱き寄せた。  
180センチ近くある彼は、小柄な私を包み込むような感じだった。  
そして少し震えていた。

私は胸がキュンッと苦しくなった。  
何年ぶりだらう・・・」んなトキメキ感。

彼は、後ろ向きの私をそっと向き合わせ、少し震えながら唇を重ね  
た。

私たちは、お互いが求めあい、何度も愛し合つた。

「お腹すいたよね？」

彼の声を聞くのは、これが一回目。

「そうだね・・・」

私もこの言葉が一回目。

「近くにコンビニがあったから、何か買つてくるよ。みるべくそつまつて、彼は買い物に出て行った。

私はバスルームに移動し、浴槽にお湯を溜める準備をしていた。  
すごい勢いで部屋のドアが開く音がした。

何？ 誰？

思った瞬間バスルームのドアが開いた。

そこには、慌てた彼の姿。

「どうしたの？」

私は驚いて聞いた。

「買い物に行つてゐ間に戻なくなつてたひびつじよへ。つて思つて。  
慌てて帰つてきた。そしたら、本当に部屋に居ないから。  
凄い焦つて……。」

そう言つと抱きついてきた。

超かわいい。もともと年下好きの私には、たまらなかつた。  
母性本能がくすぐられた。

「どこも行かないよ。勝手に消えたりしないから。  
何買つてきてくれたの？」

向こうへ行って早く食べよ。」

私は、まるで子供をあやすよつて、彼の頭を撫でながら言った。

私たちは、彼が買っててくれたサンドウイッチを食べながら、話をした。

そう、お互<sup>い</sup>いのことを何も知らない。名前すらも。

「私は、柏木歩亜<sup>かしわぎ ふあ</sup> 27歳。」

あつ、少しさば読めばよかつたかな . . . 。

年齢を聞いて驚かれると思った。

しかし、彼は特に驚いた様子もなかつた。

「僕は、青山智久<sup>あおやま ともひさ</sup> 17歳、高3。」

「えつ、じゅつ、17歳? 高3?」

私は、動搖を隠せなかつた。

いくら年下好きとはいえ、十歳も離れているつえ、まだ高校生だと  
は。

「年下は駄目?」

智は、膝枕を求めながら私に問いかけた。

「駄目じゃないけど . . . 犯罪に近くない?」

「良かつたあ、駄目じやないんだ。

犯罪じやないよ、だつて合意のつえだもん。」

私の膝の上で無邪気に笑っている智を見ていると、本当に何も問題のない事のような気がしてきた。

中性的な智のルックスは、私のど真ん中だった。

そしてまだ経験の浅いキスも、ゼレかない中に優しさがあり、幸せな気分になつた。

田もすつかり暮れていた。

「そろそろ帰らないと。明日は、学校でしう?  
休んじゃ駄目だよ。」

「嫌だ。まだ一緒にいたいよ。歩亜と一緒に入れるなら、学校なんて休んでいいよ。」

智は、さつきまでとは違ひ強い力で、歩亜を押し倒した。  
手首を強く掴み、押さえつけた。

「ガキ扱いすんなよ。」

ドキッとした。男の表情だった。

「わかつた。じゃあ、明日早起きして帰りひつ。今日はずっと一緒にいよ。」

智の生活を崩したくなかった。

一時の感情に流されることは、後に後悔するから。  
でも、若い智には、まだ理解できないことだった。

窓から見える水平線から、朝日が昇りだしていた。

智は、うとうとしながらも、一晩中歩亜の寝顔を見つめていた。  
智自身、何故こんなにも、会つたばかりの歩亜に魅かれているのか  
わからなかつた。

ルックスも良く、明るく楽しい性格の智は、いわゆるイケメン。

当然モテた。

しかし、付き合いつまでの気持ちになる子は現れずについた。歩亜への気持ちは今までに感じたことがない感情だった。愛おしく、どこか懐かしかった。

歩亜が田を覚ますと、やさしく見守るような智が傍にいた。

「おはよう。」

そう言って、頬にキスをした。

一人はチェックアウトし、駅までの道、智は、ふと不安にかられ、

「必ず連絡するから、また、会ってくれるよね。学校もちゃんと行くから、約束する。」

智は、昨日の夜、歩亜が何を言いたかったのか、少しは理解していた。

智は鎌倉方面へ、歩亜は藤沢方面へ、別々の電車に乗つて一人は別れた。

帰りの電車の中、智は歩亜にメールを送つた。

すぐに、返信があった。

しかし、見るとエラーメッセージだった。  
間違えてアドレスを入力してしまった . . .  
智は、歩亜に連絡を取る術を無くした。  
あとは、歩亜から連絡を待つしかなかった。

一方帰りの電車の中で歩亜は、アドレス変更の設定を行っていた。  
そして、智のアドレスを消去してしまった。

このまま何度か、連絡を取つたり、会つたりすると、  
本気になつてしまつのが分かつたからだ。

智の、一番楽しく大切な高校生活を、  
自分のよつな三十路手前の女に、費やしてほしくなかつた。  
自分は、智には不釣り合いだと感じていた。

歩亜は、この出来事を、封印した。

## 第2章 再会

「あー明日、由比ヶ浜行くの気が重い . . . . .」

「そんなこと言わないでよ。

確かに乗換やら、この時期は、観光客で混んでるナビわあ。  
前はよく行つてたじやん。

そつ言えば、何で最近行かなくなつたの?」

「実は . . . . .」

歩亜の友人、優奈に買い物を頼まれた。

私はあの出来事以来、湘南方面には行かなくなつた。

優奈に、あの日の智との出来事を全て話した。

「えーっ、おかしくない？

何で、歩亜が決めるの？

彼が決めることがじやない？」

優奈は、いつもスパッと物事を指摘してくれる。

「その子が、自分の高校生活、三十路前の女に費やすのは嫌だ。  
つて言うのなら仕方ないけど・・・」

何も言われてないし、第一まだ何も始つてもいいんじゃないじゃん。  
歩亜と過ごすことが、彼にとってプラスかもしけないし。」

優奈の言葉が、胸に突き刺さった。

私は、智にひどい事をした。

改めて思った。

智のためと言いながら、実は自分がのめり込んでしまい、  
別れが来るのが怖かつたのだ・・・  
自分が傷つくのが怖かつたのだ・・・

「でも、もう今更だし・・・半年も経っているから、智も忘れ  
ているよ。

どちらにしても連絡も取れないし・・・」

そう、半年も前の事。実際自分も優奈に話さなければ、

忘れかけていた。

私は、気が重いながらも、次の日、由比ヶ浜へ向かつた。

鎌倉駅で乗り換え、別のホームへ向かつ途中だつた。

「ねえ、今の子超かっこ良くない？」

「やつぱり？私も思つた！」

何であんな所で働いているのかな。もつたいない。」

女子高生の黄色い声。本当に若い子の声は、口口口口、転がるよつな声だ。

どんな内容でも、楽しげに聞こえる。

私は思わず、すれ違ござまにコツとしてしまつた。

売店に立ち寄りガムを買った。

「五円です。」

聞き覚えのある声。

ふと顔を上げると、智の笑顔があつた。

心臓が止まるかと思った。  
ところはこういう事か。

私は、お金を置きガムを奪い取るように立ち去つた。

「 . . . . . 」

「歩亜！」

周りの人たちが振り返るぐらいの大きな声だった。でも、聞こえないふりをした。

「待つて……」

智は、売店から飛び出し、私の腕を掴んだ。

「人違いです。」

私は手を振り払おうとした。  
その瞬間、後ろからしっかりと抱き寄せられた。  
強くでも包み込むように優しく……。  
そして、少し震えていた。

初めて抱きしめられたあの時のよ。

「やつと見つけた。ごめんね……」

「えっ？」

謝らなければならぬのは私。  
何で智が謝るの？

聞くより先に、智が口を開いた。

「俺、間違えて歩亜のアドレス登録してたみたい。  
絶対メールするって言つてて、しなかつたから  
歩亜怒つてると思って。」

ふと気付くと、周りの人からの視線が痛かった。

「ちょっと、恥ずかしいんだけど・・・」

「あっ、そっ、そうだよね。」

智はよみやく周りの反応に気付いた。

「いらっしゃって。」

智は、私の手をひっぱり、売店の裏の方へ連れて行った。

「もうすぐ交代の奴が来るから、そしたら上がりだから、ここで待つてて。」

ロッカーが並び、机と椅子が無造作に置かれた休憩室で、智を待つた。

10分位だろうか、私には凄く長く感じた。

ドアが開く。

智かと思っていたら、男の子が入ってきた。  
智が言っていた交代の子だ。和樹だ。

「あっ、あの・・・わたし・・・。」

戸惑っている私に、

「こんにちわ。」

和樹はニコッと笑つて挨拶した。  
智より少し年上かな？

「やつと見つかったんですね。」

着ていた上着を脱ぎながら、和樹は話し始めた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1477d/>

---

もう一度君に逢いたくて

2011年1月28日15時03分発行